淡江社だより
第４号
平成18年８月発行

＝乾長江遺墨展特集＝

遺墨展をかえりみて

乾　たみ

乾長江遺墨展を無事に終えてほっとしています内に時は過ぎ、若葉の候となりました。ふりかえって、淡江社会員の並々ならぬ結束の強さを思い、感激は今も私の心に満ちております。参会者の多くの方によろこびとあたたかさと驚きの言葉をいただきました。ありがたい事でした。中でもひときわ強く私の心に残る批評をいただきました事をご披露いたしましょう。それは、篆刻のことです。

「長江先生は篆刻もなさっておいででしたのですね。知りませんでした。先生の篆刻作品を今拝見して驚いています。まことに美しいです。私はよく人様の篆刻作品を見てきておりますが、この様なきれいな作品を今まで見た事がございません。見事です。」以上の様な言葉を残されて静かに会場を去ろうとなさった方は、文房四宝や書に関する出版物を商う老舗のご主人でした。私は感動して「ありがとうございます」と深く頭を垂れるのでした。ずっと長江の近くにいながら鑑賞眼など全くなく過ごして来ました私です。かくかくしかじかの印材を買ってきてほしいと言われればその様にしておりました。彼は印稿を整えたあとコツコツと石を彫っています。私はその様子をながめ、よくまあ御苦労な事、でもこれが方寸の世界に遊ぶ人の姿なのかと思うだけでした。長江は生前、外部の誰からも篆刻作品について批評を受けたことはありませんでした。ですから、はじめて目利きの老舗の主人の批評と、はからずも任道斌氏がその寄稿文中に、行書 草書 隷書 篆書の諸書体は落ち着くべきところに展開されていると讃して下さった事を思い合わせ、しみじみとありがたさと驚きを感ずるのでした。

次に、会場にはおいでになれない方で、図録を受け取られた方の感想をしるしてみましょう。金沢在住の学者の言です。

「実に典雅流麗な遺墨図録を御恵贈下さいまして心から御礼申し上げます。各頁に収録されました百点近くにのぼる作品の明快にして格調の高さに驚くばかりでした。篆刻もなさっておられる事を知り興味をそそられました。石川の生んだ聖哲の鈴木大拙の言文にも魅せられました。……」

また、他の参会者の一人は、大きな作品も勿論ですが、一字書の、真、謙、虚、愛、の夫々の文字を拝見して、この四字を選ばれた先生のお人柄を感じました、とおっしゃいました。

また、中年の紳士は、帰り際に、先生の書論についての御著書はございませんかと問われました。多分、「論書一言」をご覧になってかと思います。ございませんが稽古や話の折々に述べておりました、と返事をいたしました。

いろいろな感想をいただきましたが、長くなりますからこの位にとどめましょう。

ところで私はこの六月十九日で八十八歳になります。遺墨展の最後の日、打上げを祝う折に、私の米寿の祝いを重ねていただき、恐縮でございました。淡江社の皆様、旧会員も含めて厚く御礼申し上げます。年齢を重ねると共に体力は落ちて参りますが、これからも十分心して、ここ榛名の里で暮らしてまいります。淡江社の発展を祈りつつ。

二〇〇六年
五月六日

遺墨展開催にいたるまで

塚本　尋

遺墨展は成功裏に終了しました。銀座で四五二・八㎡もの会場を一週間おさえて展覧会をするのは並大抵のことではないそうです。生誕百年の記念展に九百人もの来場者を迎えました。多くの方々のご尽力の結晶で、開催にこぎつけたのです。ここに、開催までの経緯を報告し、感謝の思いを新たにし、あわせて些かの感想も述べさせていただこうと思います。

0、計画スタート

遺墨展の計画が日程に上ったのは二年前の二〇〇四年春でした。長江先生生誕百年の記念行事として、社中展とは別に長江作品だけの展覧とする方針が決まりました。

一、作品の確認、リストの作成、必要とされる会場のスペースの予測

まず、どのくらい作品があるのか、保存状態はどうか、という確認が必要でした。落合教室のそこここから所蔵作品がでてきました。ざっと百はあります。ひとつひとつ開いて確認、サイズを測り、作業のためのスナップ写真を撮り、リストの作成が行われました。作品の虫干しのために数日間広げておくなど、時を要します。実行委員の方々は分担をし都合をつけあいながら作業を続け、三ヶ月余りの仕事となりました。そのあとも、個人所有の作品をお借りしたりして、二〇〇四年秋、百余の作品がリストアップされ、これに基づいて、展示スペースが試算されました。

二、会場選定と予約

今回の会場には相当の広さが必要でした。過去の展覧会の経験を総合して、いくつかの候補の中から「東京銀座画廊」を選び、交渉の末、会場が決定したのが二〇〇五年の二月でした。希望していた二〇〇六年三月の予約がとれました。（長江先生の誕生日は三月二十四日です）

三、業者の選定とレイアウト初稿

会場のしつらいには業者への発注が不可欠の部分がありました。長尺の巻物を多数展観したいわけですから、そのための展示台だけでも大仕事です。東京銀座画廊での展示作業を数多く請け負っている牧野商会に依頼することになりました。いつもの淡江社展や有志展では、実行委員の方々が会場レイアウトの模型を作って、展示の案を十分に練って準備をします。展示レイアウト模型を作るからと聞いた牧野商会の担当者は、そこまでやってくださるとはありがたいと驚嘆していました。適当に並べている巷の展覧会のことを聞いて逆にびっくりしてしまいました。展覧会全体が一つの作品であるという長江先生のスタイルは淡江社の展示の真髄です。

四、図録作成

①　撮影

図録の作成は二玄社に依頼しました。一九八三年に出版された『乾長江作品撰』は二玄社製作です。今回は、作品を全部載せたいと思いました。しかし巻物は「離騒」六二m、「書譜」六四m、「漢礼記碑」一五m、「韓愈・石鼓歌」八m、「蘇軾・石鼓歌」一二m、「臨・石鼓文」九m、「帰去来」九m、「赤壁賦」、一二m、「大字心経」六四m、などのように膨大です。図録掲載は一部分にするしかありません。そこで巻物は巻頭と巻末を、それ以外は全作品を撮影することになり、二玄社のスタジオでの撮影を依頼しました。作品搬出にあたり、リストの再チェック、全ての梱包、積出確認、そして返却時のチェックなど、多くの委員の時間と労力を要しました。

②　文字原稿

釈文の作成は、展示のためにも必要ですし、全てに亘って調べ上げねばなりません。ここ二十年くらいの間の社中展に出品された作品については、出品者研究用の釈文集がありましたから釈文をまとめるのは比較的容易でした。また、長編の作品も、インターネット上のデータベースからの検索でさしたる労もなく集められました。しかし、比較的早い時期の作品は資料もなく、一つ一つ読み取っていかねばなりません。出典が数箇所に及ぶものや出所不明のものもあり、解読に苦戦したも

のも少なからずありました。落合教室のお稽古のあとに先生方に解読していただいたものもあり、図書館に通って調べたりなどして、最終的には全ての作品の釈文が完成しました。大変な作業でしたが、これをもとに会場にも釈文を張り出せたわけです。会期中に、釈文が全部出ていて読めるからとても助かる、普通はここまで出ていませんからねえ、という評をいただきました。

釈文と同時に各作品の製作年代なども確認していきました。干支のないものはなかなかわかりませんが、それでもおおよその製作年代順が見えてきました。加えて、長江先生の略年譜を作成、また、作品一覧を作るにあたっては各作品の題について検討しなければならないという課題もありました。この作業においては、二玄社の編集者とりわけ編集協力者の和田夏生氏にご教示いただきました。作品の題については、それまでは、発表時の題や通称で呼んでいましたが、そのままでは不都合であるとして、出典名と取上げた部分を示すことができる形に統一しました。「詩経大雅蒸民句」「蘇軾書與可画竹三首其一」というぐあいです。目録に掲載された題名が聞きなれないものになってしまったのは、ここでの判断のせいです。この問題については、いずれ個々の作品について、発表時の題名とその意味を含めた作品鑑賞という観点から研究がなされることを希望します。

さらに文字原稿としては、序文、挨拶、後記、などを準備しました。

序文の成立に至る経緯は次のとおりです。二〇〇五年十二月初旬、かねてよりの友人である中国人画家関乃平氏に長江先生の作品撰やその他の資料をお見せし、遺墨展の準備中であることを伝え、できれば序文を書いていただけないかとお願いしたのです。関先生はご快諾くださり、さらに任道斌先生にも頼んでくださいました。そしてご多忙中にもかかわらず急いで下さり、年末にはお二人からの玉稿が届いたのでした。一読して驚愕しました。真髄をついている評語にはただただ感謝の思いです。任道斌先生は鑑定の大家でもあられる方です。簡潔にして急所をぴたりと押さえた美しい序文が巻頭を飾ることになりました。

以上の諸原稿に加えて、挨拶文と後記をご担当の方に書いていただき、図録の材料が出揃いました。

③　レイアウト

図版頁のレイアウトは図録の良し悪しを決定します。展覧会場での展示同様、この点でも淡江社には長年の経験の蓄積があります。レイアウト案を納得のゆくまで練り、編集側とやりとりを繰り返し、作品の文字と釈文の対照のこまかなチェックを行うにはこれまた先生方とご担当の方々にご尽力いただきました。

五、会場レイアウト案の作成と展示業者との折衝

三月に入り、会期も目前に迫った頃、会場レイアウトの詰めができ、牧野商会への指示内容が決まりました。展示台を発注し、細かい打合せをしてゆきました。一方で、目録や図録も印刷に入りました。

六、会期中の役割分担、諸備品の整備と搬入準備

ここまで来ると、諸準備は展覧会に慣れた方々が「いつものようにね」というだけでわかってしまう息のあったチームワークのもとに進みました。経験豊かな団体の威力です。受付の割振りも、備品の整備も、貼り出すお知らせも、お花の準備も…とそれぞれの作業が流れるように進んでいきます。会場に持ち込む出版物や関連資料の印刷も手分けして準備万端整いました。

七、設営

今回は、牧野商会という専門業者に頼んだことと、作品が一箇所にまとめてあったことで、作品の搬入から展示、最後の撤収も比較的スムーズでした。作品配置の最終調整は諸先生方の見事な技で、落ちつくべきところに全ての作品が収まりました。あえて展示をやめたものも含めて、展覧会全体が一つの作品、という淡江社のポリシーが貫かれた会場になりました。名札や釈文もパネル仕立てで手間をかけただけに見栄えよくできて、あとはオープンを待つだけとなった時は感無量でした。

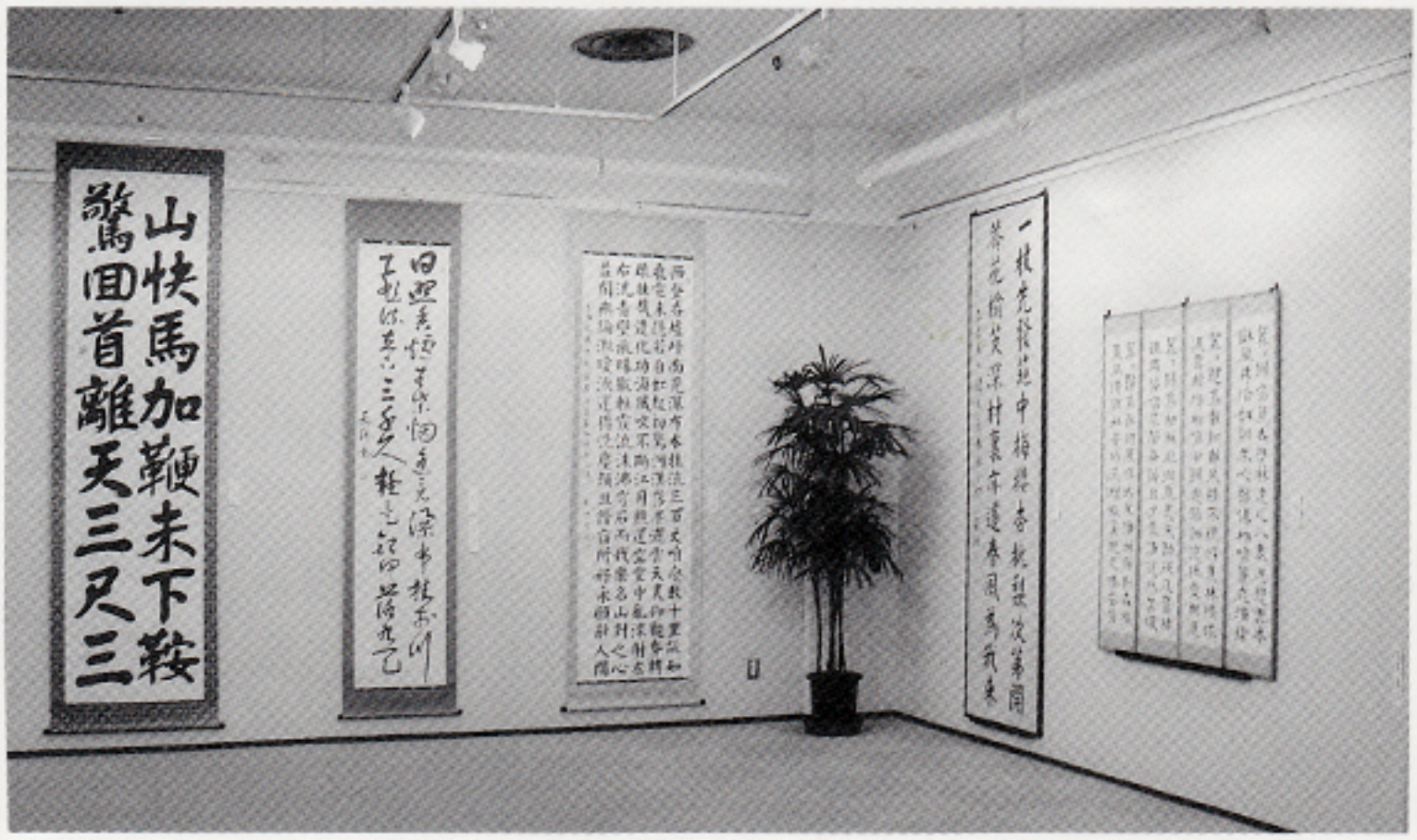
八、経費の捻出、協賛の呼びかけ

経費については乾家と淡江社の拠出金に加えて、協賛金の形で御芳志をいただきました。会計報告は総会に付議されたとおりです。また、皆様がいつも手弁当でボランティア、さらに多くの持ち出しをして下さったのだと思います。多くの時間と多くの働き気働きの無償のご奉仕に支えられての展覧会の成功でした。

九、総括

遺墨展はこの二年間の淡江社の衆智の結晶だったと思います。それは、形あるものとして残された遺墨作品の展示会にとどまるものではなく、長江先生から受け継がれた全てが凝集した空間であったと強く感じました。作品を創作し展覧するということに対する理念、長年にわたり製作発表を続けてきた中で醸成された高雅なしつらい、ひとつひとつの作品への作者の思いをその製作背景を踏まえて深く理解しようとする関係者の鑑賞態度。あたりまえのように思っていたこれらのことが、実はたいへんなことだったのです。いろいろな展示会をご覧になっているのであろう来場者の方々がいずれも驚きの表情を見せ、最大級の賛辞を述べられたのを目にし耳にして、いままで漠然と「ほかとは違う本物がここにある」と思っていたものの実体に一歩近づいたと強く認識しました。広く世に問うことを続けなければならないと思いました。

遺産は死蔵された時に輝きを失います。長江先生の遺産が光を放ち続けるために、思いを新たにして研鑽に励もうと決意を新たにするものであります。



＝特別記事＝

私の眼に觸れた〝書〟の或る世界

乾　節子

私が初めて展覧会の書に接したのはまだ幼児の頃、上野竹の台の美術協会での、選書奨励会展であった。母が、全紙に大筆を以って揮毫した「神清」の二字を出品している。確かその際、同じく出品された父の門下の、波多野承五郎氏の作品が、当時の宮内省にお買い上げになったことを記憶している。

母は家事のあいまに襷と前掛をはずしては、座敷の毛氈の前に坐し、「神清」の大字を全紙に、大筆で稽古していた。しかし、私は出品制作ということは毛頭考えても居ず、会場へ伴われていって初めて母の作品を見、幼な心に感動はしたが、私の頭には誰でもするあたりまえのことのような、そんなおもいがしていた。

事実、その頃は知識的な家庭は当然、八百屋も魚屋も大工も植木屋もというように、各商家の人々職人たちも同様、都会はもとより鄙(ひな)でも、農家耕人に至るまで、凡てが硯をもち、矢立をもち、墨壷をもち、筆を用いて、大小自在に書きこなす、毛筆は人々の生活の中にあったのである。看板屋、提灯屋などは、その店の前で佇んでは飽かず眺めていられる情景が各所にあった。明治、大正期はそうした風(ふう)であったのだ。

従って、母がその父から、生き形見として與えられて大切にしていた、梁川星巌真筆の小品、しかも無落款のそれを度々見せてくれたが、年少だった私にでさえも、星巌のその流麗な書風が眼底に、明瞭に深く印象せられていたものと見え、後年、旧知を訪ねての旅の時、佐賀の、或る、これは旧いお宅の袋戸棚の下方の壁にかかっていた小品の軸を、ひと目で、「これ、星巌でございますね」と胸おどらせてそういう私の言辞をうけて、その家のご主人は目を輝かせ、「やっぱり、そうですか、よく、ひとが見ては無落款だが若しかすると、これは星巌らしいと、それは目の利く人がそういわれるので楽しみにしてはいたが、やはり、そうですか」と、本当にうれしそうにほほえまれた一事がある。但し当の私は、星巌の草書だけしか不分明なのである。

当時は、たとえ鉛筆が作られようと、万年筆が輸入されようと、人各々が、毛筆というものについては現今とは、まるで異なる風(ふう)や、体(たい)をもっていた。

だが、特に、書や畫を業とする人々は、自らなる己を己として生かす、何ものかを育成してゆく、一歩前進のすがたといおうか、人々からその芸術性をそこはかとなく認められるといおうか、或る尊敬に似た感情さえ持たれたにもかかわらず、所謂、書家（畫家も同様であった）とよばれる人々の生活は、なかなかに貧しくきびしいのが常であった。

だが、尤も、今日でいうパトロン的な人をもっていた作家は別である。私の印象に強く残っている、端正な楷書を書かれた、月出東山という方などは、その家族の方達のお上の、今、何をしておられることかと、私は折にふれては思いやりするのである。

高い芸術性をもつべき書が、近頃、年を重ねる毎に、だんだん低くなりはじめているのを感じるのは、この私ばかりであろうか。所謂、書家と称する人々が、己の作品に、似非気韻を自負しはじめてきた故と私は思う。

だんだんに、高慢な性格が度を増した人達、或いは自己追究のいい加減な人達の間に誤解された六朝風から、卒意の名のもとにつくられた無態な宋風、明清調、又、新風のつもりか前衛という当時流行の、文学から移行して来て、いとも奇怪な「墨の芸術？」とか「黒の美」とか、筆の本質の理解の無い為に、使いこなせぬ筆を、あたら被(こうぶ)ってしまった「書家」の名の故か、書の展覧会といえば不可解なものだという印象を世人に与えてしまった人々を、私は救いがたいものに思う。

彼の大正十年、日本書道会が、平和記念博覧会の際、芸術として扱われることに、いわれのない、不本意の意志表明をして、書道界を混乱せしめたので、元来はこうした問題にかかわることを好まぬ父ではあったが、当事者の宇佐美東京府知事の要請により、「平和記念博」という名の故に、その門下を率いて、田口米舫、佐藤梅園とともに帝国書道

会を結成し、日本書道会の所謂、反対側の人々、稲垣、大田、杉渓の面々、専門家としての近藤雪竹、丹羽海鶴、比田井天来、柳田泰簾、岡山高蔭等を説き伏せた、豊道春海の努力と相俟って、斯会の混乱をまとめ、会長に後藤新平を推した。

後藤新平は、父淡江が領台当時、要務を帯びて勤務中、民政長官として活躍、その当時から親交があったのである。

父を識る後藤新平は悦んで應じられ、平和博終了までその責務を担い、博覧会終了とともに、帝国書道会は解散した。

門下の関直彦らその他の人々は、折角の結集を、又と得がたく思われてか、中味は少々変わってもこの雰囲気は続けたいという切なる要望が起こって、いわば全国の諸書道会の曾ってない、大同団結に、ここへ田中舎身らも加わって、日本書道作振会が誕生した。

しかし、一方、民間に浸透していた筈の書は、所謂似非芸術化の波となって、却って民衆から遊離していった。

「前衛」という呼称が、本来の前衛とは、はぐれたような印象を与える始末となったのである。はやっているように見えて、実はすたりもの、いわば斜陽的な感をさえ与えている現状である。

「書」は、ひと、個々のもので、決して特別視はゆるされず、精進怠りなければ、それは勿論傑出する。「能書家」といわれることも可能だが、書家と呼称しながら、実は能書とは何としてもいえぬ人々がいかに多い現実であることか。

深い心と技とが相伴って、はじめて、それは云えることではないだろうか。

戊申書道会展とか、泰東書道院展などが催された頃、当時の書道展は、会場の順路の中程に、各書家先生方の、席書の設備がされていて、その日の揮毫の方によると、身動きならぬまでに、ステージを囲む人垣が出来た。同時に抜目なく、筆屋も紙墨を商う者も出張店をもった。それは所謂、名の聞こえている方の時だった。

伴っていってくれた母は、知見の故もあるので、ずっと後方に居た。年少で、しかも興味津々の私は、青竹の太い手摺に添って佇ち、その方の毅然たる揮毫の情景を想い描きつつ、じっと目を凝らした。

さて、処が、使いならされたらしい大硯には、宿墨のかたいかたまりの真中に、墨汁がたたえられていて、和服のその方は、右袖を襷でしぼり、手にされた大筆は墨のかたまりのようだったが、左手に煙草を挟みながら、前歯でグググッと噛みしだいてから墨汁に浸し、そうして泡立っているその筆先で半截にざざざっと、それは、筆毛の弾性も全く無頓着に、それは無視そのものの蕃勇とでもいおうか、横なぐりに、体(たい)など全くなさないままに、大汗でものされると、そのままいともことなげに落款までされてしまった。私は暫し、全く、唖然とした。

あれであの方は、風韻とか、気韻とかを云々されるものだろうか。心技とは、夢々、決していえないものだと考えながら、とにかく、あれこそ、一種の字描き職人ともいえないと、私は結論した。

日展にしても、毎日書道展にしても、迫真的な、心揺らぐような、その作品の前を立ち去りがたいような作品に、接し得る機会が少ないのはどういうわけか。

発表されている、書の大きな展観に関するかぎり、私は、いつも、人間性の、低俗に堕してゆくのを、しみじみと寂しく思うのである。

(註) この原稿は昭和五十三年七月三日の消印で、当時京都等泉寺におられた節先生から、長江先生におくられたものです。

生誕100年記念
[乾長江遺墨展]
3月21日(火・祝)～3月26日(日)
主催　淡江社

長江先生とわたし

遺墨展を終えて思うこと

糸柳静汀

長江先生の遺墨展には多くの方々が御来場くださり大盛況のうちに終わりました。日ごろは先生のお手本に触れていますが、このようにたくさんのすばらしい作品に接することができましたのはこの上もなく幸せでした。いつも感謝しているつもりですけれども改めて先生への思いを強くいたしました。

会場に入りますとすぐ先生のお写真がありました。何とお優しく威厳に満ちていらっしゃることでしょう。伝説の名家とたたえられた先生の書を前にして称賛と感動のいぶきをそこここに感じました。友人が「先生の字は大好きです。眺めているとおだやかな気持ちになり、すうっと落ちつきます。どこが違うのですか」と私に尋ねました。

「従来の習字は手本の模写に専念して、筆についての認識にさえ欠けている。筆は無理のない形でおろし集めることによって、乱さず扱いうる」と玉江先生は述べられ、長江先生も「心の据え方を核とした厳正な筆法によってこそ正確な書は得られる」と言われています。ひたすら筆法を習練するという姿勢こそが淡江社たるところではないでしょうか。

私が先生のお宅に伺うようになったのは、私の伯父と淡江先生との親交があったためでした。伯父の言によりますと大学生で上京中、先生のお家が見える所に下宿していてお近づきが生まれたそうです。

私はこの文章を書くにあたり淡江社だよりを読み返しましたら、長江先生のご草稿の一部に目が止まりました。それは先生がお父上様にご指導を仰がれたのが小学校から中学の初めという個所でした。はっとしました。見逃すはずがありません。伯父は長江先生より十歳年長、まさにこの頃この場所で長江先生との遭遇があったに違いありません。

ここに一通の古い手紙があります。「乾先生も高校のころまでは書家の子供さんがその字ではと、小生(伯父のこと)に笑われていたのに今は立派な書家、一つに努力すればすごいものだとつくづく考えます。」としたためてあります。私に、伯父は何事も努力せよと言いたかったのだと思います。お前は字が下手だから、習うなら先生の所へ行きなさいとの伯父の勧めがあって現在に至っています。このようにしてご縁あって淡江社に入門できましたことは大変幸せ者と痛感しております。

私の入門は昭和三十九年の九月でした。まだ暑い明るい昼下がり、何でもいいから二文字を書きなさいと先生は筆と半紙をお出しになりました。筆はふわふわとして定まらず手もふるえていました。二度と同じようには書けませんとおっしゃいましたので、すぐに上手になれるような束の間の錯覚がよぎりました。

それからの長い道のり、対面で筆を持って下さいました。ずい分スムーズに感じられましたけれども、ある時先生が強い力を加えていられるのを知って驚きました。それほどだめな私を先生はなんと全身で支えて下さっていたのです。初めは目に見えた上達がぱたりと止まり、書けども書けどもうまくゆかず苦しくなるばかりでした。先生は「目に見えなくても上達しています、いつかひょいと階段を昇るように変わりますから」とメンタルな面までご指導下さいました。

私の勤務が多忙になり遅く伺うことが多くなりました。もうだれも居ない教室で先生は必ず待っていて下さいました。「いらっしゃい」とおっしゃって優しくていねいに、時には厳しく教えて下さいました。

淡江社だより三号で奥様が記しておられる直筆のお手本を私もずっと頂きました。先生は四枚も五枚も下さるので、私はそれをこなすものと思い一生懸命についていきました。先生がある時ぽつんとおっしゃったことがあります。来週までに皆さんのお手本を何十枚と書くのですよと。それからもずっとこの直筆お手本は続きました。先生を心配して、早く印刷のお手本をお作りになればおらくなのにとの声が上がりましたが、「私も日々進歩していますから」とおっしゃってなかなか実行

長江先生と翰墨展の思い出

島田　簾江

長江先生の生誕百年記念遺墨展が盛会のうちに終わり、ひと月が経過してなお日々新たに先生の偉大さを偲ぶこの頃である。遺墨展を観て長江先生の書に襟を正した書家のみならず芸術家は、少なくないと私は思う。

手のかかる生徒としては最前列に位置していたと自負？する私は、翰墨展にまつわる先生の思い出で印象的なことが三つある。

その一、入門して三、四年目の翰墨展の前、締め切りが近付いても、仕事を理由に一向に作品を書こうとしない私はある日先生からお電話をいただいた。「今度の日曜日にお教室にいらっしゃい。」私が恐る恐るお教室に伺うと、普段のお稽古の部屋で二号の筆とお手本を前に先生がいらして、「さあここでお書きなさい。」といわれ、ご自身は奥の部屋に入られた。ただひとり、静寂の中、黙々と筆を運び、時折り先生が覗かれる。そんな繰り返しのあと暫くしてから、「ああ、(筆が)伸びましたね。それを出しましょう。」とおっしゃった。短時間ではあったが、凝縮された、忘れられないいっときとなった。

その二、家の事情、仕事のことで筆を置き、四、五年のブランクのあとまたお稽古に通い、翰墨展に向けて作品を書き始めたある日、「あなたは今、非常に気分が高揚していますね。」と長江先生に励まされ、自分でも気分が乗っているのを実感し、今度は気持ちよく作品が書けると思った矢先、母が亡くなった。暫くして先生がお電話をくださった。「翰墨展に出しますか？どうしますか？」とのお尋ねで、締め切りはとうに過ぎていたし、精神的にまだ立ち直っていないので逡巡していると、「お書きなさい。まだ間に合いますよ。」先生の言葉は私を奮い立たせ、意を決して、「書きます。」とお返事した。今見ても涙が滲んでいるかのような作品になり出来栄えはよいとはいえないが、見る度に先生のお電話の声が蘇ってくる。

その三、翰墨展の作品に王維の五言絶句を篆書で書こうと決め、見ていただいた。「これをどのようにまとめますか？」といわれ、先生が決めてくださると思い込んでいた私は当てが外れた。言葉ではおっしゃらないのだが「自分で考えなさい。」と言うことである。その後何度か作品を見ていただいたが、何もおっしゃらない。切羽詰まって私は考え始めた。仕事の合間にメモ用紙に文字を置き、試行錯誤の挙句、自然に浮かび上がってきた形を半切の紙に木炭で記し、見ていただいたところ、チラッとご覧になって「あ、それでいいでしょう。」と言われた。これは数少ない、気に入った作品のひとつとなった。

翰墨展の都度蘇る私の大切な思い出である。

されませんでした。

今回の遺墨展ではお亡くなりになる少し前に書かれた力強い大作を拝見し、驚嘆のあまり目頭が熱くなり「先生！」と叫びたくなる衝動にかられたのは私ばかりではないと思います。

また先生は大変器用でいらっしゃって、書道にまつわる小物、例えば印褥や虫めがねをしまう箱、木彫による硯の蓋など、見事にお作りになりました。篆刻も教えて頂きました。作品に合わせて幾つも印を作って下さいました。先生の彫りは説明しがたい味わいの美しさで、私は和風ダイアモンドカットと名づけたいと思います。お忙しいのにいつの間になさるのか不思議に思うほどでした。

先生は若くしてお父様を亡くされ、お立場上一身にその重責を背負って強い意志と覚悟で生涯を通して書の道を窮められました。先生のご功績は日本はもちろん中国でも高く評価されているのは申し上げるまでもございません。

私はその後先生がお亡くなりになる前十年間くらい、やむなくお稽古を休んでいましたので、先生がお身体を傷められた時など何の心配もせず申し訳なく思っています。今は仕事が一段落してから再入門して、本先生にご指導いただいております。これからは淡江社の発展を祈りつつ、長江先生のご恩を忘れることなく精進して参りたいと存じます。

書道教室ご案内

無理のない正しい筆使いで
字を書いてみませんか。
書についてお気軽に
お尋ね下さい。

ベテランの講師が基礎から
個人指導をしております。

稽古日　木・金・土曜日
（お問い合わせは稽古日に
お願い致します。）

淡江社
東京都新宿区中落合二―一七―三
電話　〇三―三九五一―八一五二

訃報

淡江社の理事として長年にわたり尽力された西岡青溪氏が五月十四日に、また古橋盧山氏が七月二十三日に逝去されました。
お二方のご功績に感謝申し上げ、つつしんで哀悼の意を表します。

学習会（仮称）のお知らせ

長江先生の書法への理解を深めながら、会員相互の交流を図る目的で開きます。
第一回は長江作品の研究及び書法の骨格をなす筆法の扱い方について学びます。奮ってご参加下さい。

九月十八日（月）敬老の日　十一時
落合教室
昼食持参のこと

編集後記

例年にも増して不順な天候の推移の内に、夏を迎えました。長江先生の遺墨展も盛会裡に幕を閉じ、皆さまには余韻に浸っておいでのことと思います。展覧会開催にあたり、乾家の皆様の多大なご寄附を頂戴し、会員並びに淡江社有縁の人々の志の結集により実現できましたことにあつく御礼申しあげます。

数々の遺墨を目の当たりにし、今さらながら先生の並々ならぬ精神の強靭さ、弟子への愛情、書にも篆刻にも言葉を超えた内面の追究をされたことに深い感動を覚えます。先生の真摯で清新な生に触れさせていただき感謝に耐えません。

先生没後時を経て淡江社も先生の精神を、どのように継承し発展させるか考える時を迎えております。皆さまのお知恵をお聞かせください。

（K・K記）

発行　淡江社
東京都新宿区中落合二―十七―三
電話　〇三―三九五一―八一五二
印刷所　アサヒ印刷
山梨県韮崎市本町四丁目九―五六
編集委員　金丸紅花・松原白葉
題字　武藤素英